

〔現地報告〕

ノマドの末裔たち ～サラワク・プナン社会のフィールドワーク～（3）

奥野克巳（桜美林大学国際学部）

*

サラワクのブラガ川流域のプナン人たちといっしょに暮らし始めて、8ヶ月が過ぎた。狩猟を主生業とするその社会には、他のボルネオの焼畑稲作民の諸社会から見て「あるべきものがない」と思えることがしばしばある。

ボルネオ島のインドネシア側の焼畑稲作民・カリス社会では、畑地の選定、種まき、下草狩り、収穫などの機会から、家屋の新築、旅などの安全祈願、病気治しとしてのシャーマニズムや呪術、悪い夢を捨て去ることにいたるまで、ことあるごとに儀礼が行われる。他方、プナン人たちは、ほとんど儀礼の類を行わない。また、カリス社会では、食事を給仕する側が客に対して食べ物や飲み物をすすめて、客がそれを断るような場合、給仕する側は、出された食べ物や飲み物を取らないことが病気や死を引き起こすので、少しだけでも取るようにと、しつこくつめよる。「食べない」「飲まない」ことに対しては、特定の作法というべきものがある。他方、プナン社会では、「食べたくない」「飲みたくない」なら、たんに「いらぬ」「欲しくない」というだけで、その場をやりすごすことができる。

それだけではない。プナン社会には、それ以外にも、たくさんの<不在>が目立つ。

**

プナン社会には、方位が<不在>である。プナン人は、方位をつうじて、空間を組織することはない。プナン語には、そもそも、東西南北といった方角を言い表すことばがない。場所は、ふつう、「川の上流」「川の下流」という表現を用いて言い表される。プナン人は、自分の位置を、川がどちら向きに流れているのかを知った上で特定するのである。

プナン人は、ジャングルのなかを歩くときには、太陽の位置を見て、行くべき方向を定めるのではなく、「山」と「川」の「上下」に注意を払いながら道をたどる。いくつ山を越えたのか、いま足を踏み入れている川は、さきほど通り過ぎた川と同じかどうか、ということに気を配ることが大切である。森の民プナン人は、ジャングルのなかで道に迷わないかというとどうやらそうでもなく、道に迷った人の逸話は思いのほかたくさんある。

<不在>という点からいえば、プナン社会には、今日でも、時の観念が欠けている、あるいは、時系列の観念が薄いように思える。プナン人ならば、海難事故で無人島に漂着したとしても、一日（日が昇って日が沈むまで）を単位として、洞窟に印をつけて、どれくらい時が経過したのかを計るというようなことはしないにちがいない。プナン社会には、<線条>的に意識され、表象される時間がないか、あるいは希薄である。

プナン人は、自分がいつ生まれたのかについて覚えていない。もっとも、逆の角度からいえば、わたしは、西暦を用いて生まれた日を特定するという、われわれの時間経験に基づいて、プナン人にそれに対する答を期待しているのであって、年月日によって「生」を言い表すことは、人類にとって、必ずしも普遍的なことではない。だとすれば、プナン人は、自分の生まれた日付を覚えていないというよりも、むしろ、プナン人は、<線条>的に「生」を表象するすべをもたない（もたなかった）というべきなのかもしれない。

プナン人は、せいぜい、だれそれが自分よりも先に生まれた、だれそれが自分とだいたい同じころに生まれたなどという、相対的な年齢を知っているにすぎない。<線条>的な時間という絶対的な基準にたよるのではなく、ただ、相対的な差異があるだけ。

とはいうものの、プナン社会にも、時にあたることばがないわけではない。「過去」「現在」というような言い方は、たしかに存在する。ところが、それらは、漠たるものとしての過去であり、現在であり、それらは、われわれ日本人が今日もっているような、時刻や日付を介して表現するような、<線条>的な時間の観念につらぬかれているのではない。

第二次大戦後に、年代（西暦）を用いて、過去の出来事を言い表すようになったと説明するプナン人もいる。しかし、プナン人が記憶しているのは、せいぜい、1980年代以降の出来事が起こった、大まかな年である。多くの場合、「わたしがちょうど（いまの）ジャネイのころに、父が亡くなった」という語り口で、過去の出来事について語る。

「未来(*Ja*)」についてはどうだろうか。プナン人は、未来や将来について、ほとんど語ることはないように見える。「将来、わたしはこうしたい」「大きくなったら、こうになりたい」ということは、共同体のリーダーや「小学校を卒業した」数少ないエリートをのぞけば、ほとんど口にすることはないようである。

プナン人は、つい最近まで、何日か後に会おう約束をするようなときには、木の枝にその数の結び目をつくって、それを約束する双方がもち帰り、日暮れの一つずつほどいていて、約束の日が来るのを知ったという。約束の当日には、どちらかが約束の場所にやって来るようになっていて、待つ方は、約束の相手がやって来るまで待つ。プナン人は、「約束」を、<線条>的な時間の上に表すのではなく、双方の同一の経験のなかに刻みつけてきたのである。「一週間後の午前10時に、この場でふたたび会いましょう」というような、

時刻を定める約束は、現在でも、プナン人同士の間では、まれにしか行われぬ。

人類は、本来においもかたちもないカオスの状態、区切れのない連続体に区切りを入れることで、時間をつくり出し、その後、それをつうじて、時を経験するようになったとされる。しかし、はたして、人類はいつごろから、そのようにして、カオスを区切って時間を経験するようになったのだろうか。プナン人たちの時間の観念の希薄さを目の当たりにして思うのは、人類社会における時間意識の誕生の可能性という問いである。

人類に時の観念が出現するのは、食糧備蓄のために始められた農耕革命以降のことではないだろうか。農耕を始めた人類は、＜循環＞的な時の経過を意識するようになり、暦を生み出し、今度は、それをたよりとして、一定の作業に取りかかる時期を知ることになった。焼畑民カリス社会には、夜空に見える三ツ星を見上げて、かぶっている帽子が背後に滑り落ちると、種まきをする時期であるという独自の農耕暦が存在する。

40年ほど前に焼畑農耕を開始したプナン人が、現在でも、食糧だけでなく、物品を備蓄するようなことは、ほとんどない。推察すれば、それ以前のノマド時代にも、彼らは備える、蓄えるという行動をしなかったのだらうと思われる。雨が多かったり、少なかったり程度の变化しかない、季節の移ろいの少ない熱帯のジャングルのなかで、食糧となるサゴヤシや動物を採集狩猟し、その場所に食糧がなくなれば、べつの場所へと移動していた遊動民にとって、＜循環＞的な時の経めぐりを意識することは、必要なかったのである。

狩猟採集民は、一日の大半を生産活動に従事しながら、なおも食糧を確保することができない、未開の、貧しい人びとであると、長らく考えられていた。そのような見方に抗して、サーリンズは、狩猟採集社会が、じつは、産業革命以降の社会の人びとに比して、わずかな労働量の投入で、自分たちの要求をまかなう以上のものを得ることができる「豊かな社会」であると唱えた。その点から考えるならば、真の「豊かさ」とは、生きてゆくための糧を恵み与えてくれる豊かな自然に囲まれながら、時間が誕生する以前のユートピアで、時間にとらわれることなく、暮らすことなのかもしれない。

追記：これで、現地レポートを終了します。＜現地報告シリーズ＞という新企画にお誘いくださった編集委員の信田敏宏さんに、この場を借りて、謝意を述べさせていただきます。